



Title	つながる・つづくコミュニティ・ラーニング
Author(s)	石塚, 裕子; 渥美, 公秀
Citation	未来共創. 2022, 9, p. 277-295
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88557
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

つながる・つづくコミュニティ・ラーニング

石塚 裕子

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター

渥美 公秀

大阪大学大学院人間科学研究科

1. はじめに

コミュニティ・ラーニングは、2013年度からリーディング大学院未来共生イノベーター博士課程プログラムの必修授業としてはじまった。昨年度から大阪大学大学院人間科学研究科学修証明プログラムとして、また選択科目として実施しており、今年で9回目となり、14名の学生が受講した。

一昨年から続く新型コロナウイルス感染症により、今年もフィールドワークの実施が阻まれた。このため、昨年と同様にオンラインでの講義とインタビューによる「オンラインフィールドワーク」という形式をとることになった。野田村のみなさんの多大なご協力により、2つの講義と10名の村民のインタビューが実現した。

全体の共通テーマは「野田村の記録と記憶を伝承する」とし、震災・津波から10年を経て、新たなステージを迎えた野田村において、野田村の記録や記憶の何を、誰に、どのように伝えていくのか、野田村の人たちと考えることを目標とした。

本授業の本来の特徴は、学生たちが自由に野田村を動き回ることを推奨している点にあった。村民と直にコミュニケーションをとることを重要視し、話を聴かせてもらうためのアポイントをとることから始めて、興味を持った事柄について深める又は広げるためには次に誰に話を聴くべきか、どこへ足を運ぶべ

表 全体スケジュール

	時間	内容
8/20	10:00 ～	オリエンテーション
	10:30 ～	野田村の震災と復興 野田村役場未来づくり推進課 小野寺修一氏
	12:00 ～	昼食休憩
	13:00 ～	野田村・北リアスの魅力 久慈広域観光協議会事務局長 貫牛利一氏
	14:30 ～ 16:00	平谷東英さん（2班）
	16:00 ～ 17:30	小野寺勝さん（1班）
8/21	10:00 ～	小谷地栄喜さん（4班）
	12:00 ～	昼食休憩
	13:00 ～	米田やすさん（3班）
	14:30 ～	小谷地勝さん（4班）
	16:00 ～	越戸和美さん（1班）
	17:30 ～	1日の振り返り
8/22	10:00 ～	内野澤進さん、てるさん夫妻（3班）
	12:00 ～	昼食休憩
	13:00 ～	大平妙子さん（4班）
	14:30 ～	小野寺信子さん（2班）
	16:00 ～	3日間の振り返り

きか、どのような情報を収集すべきかなど、フィールドワークを自ら組み立てることを課してきた。しかし、野田村を一度も訪れたことなく、オンラインのみでインタビューを行わざるをえない今年度は、それが不可能である。代わりに過去の受講生が執筆した報告書と関連書籍(『東日本大震災と災害ボランティア』大阪大学出版会 2021)が、受講生の野田村を知る資料となった。そこから野田村に想いを馳せて、テーマ設定やインタビューイヤーの選定などを行った。その結果、「子ども・教育」、「外部との交流」、「暮らし・自然」、「世代・高齢者」の4つのテーマが設定された。

子ども・教育班では、1村1小学校、1中学校である野田村において、ソーラン節や和太鼓を通じて復興への思いを繋ぐ生徒たちを知り、学校を支える地域の活動を知って感動し、復興とは人々の関係性の再建と創造であるという結



講義の様子



インタビューの様子

論に至った。外部との交流班は、震災を機に外部と交流してきた村民との対話を通じて、コロナ禍における新しい交流の姿を考察した。また、暮らし・自然班は、東北の豊かではあるが厳しい自然と、そこで培った生きる知恵を「伝わっていく(きた)もの」ととらえ、その大切さを考察している。そして、世代・高齢者班は、ますます高齢化が進む中で若者に伝えたいことを様々な立場から聴か

せていただく中で、伝承の「場」の必要性に言及した。

次章では、各班の取り組みを受講生による報告書からの抜粋で紹介する。

2. 学生の取り組み

本章では、学生たちが執筆している「コミュニティ・ラーニング2021 東日本大震災被災地復興フィールドワーク報告書」をもとに各班の活動を紹介する。基本的には、各班が執筆した部分から著者らが抜粋した文章を転載している。

2-1. 子ども・教育班「復興教育と地域に根差した学校」

水野聖良(みずの せいら) 未来共生学講座

畠山尚之(はたやま なおゆき) グローバル共生学講座

堀崎光人(ほりさき みつと) 臨床教育学講座

私たち1班は、「子ども・教育」をテーマに小野寺勝さん、越戸和美さんのお二人に、インタビューをさせていただいた。

(1)復興教育

野田村の復興教育について、私たち1班一同が大きな感銘を受けたのは、次の2つの取り組みであった。

1つは、小学校、中学校それぞれ独自のソーラン節を、上級生が下級生に、思いを伝えながら伝授していく取り組み。2つ目は、中学3年が、かつて宮城の方から教わった和太鼓を受け継ぎ、他校との交流、各種イベントで、その和太鼓の披露とあわせて津波による被災とそれからの復興を発表するという取り組みである。

「中学校で太鼓をやっているんです。これは宮城県の方から指導をいただいて、今、続いているのです。この続けるというのは、先輩から後輩へと思いを繋ぐということで」、「太鼓にプラスして津波にあったこと、そしてそこからどういうふうにして復興していったかということ、発表していますね。」「見えて本当に感動的なものですね。」「これが、子どもたちの自信にも繋がっているようです。昔は、小さな野田村の中だけの学びで、他へ出て行ってアピー

ルするようなことはできないので、やはり、それは、弱いなど感じていたんですが、このような取り組みがあることで、自信をもった子どもたちが、できてると外から見て感じます。」(小野寺勝さん)

「ソーラン節はやってました！伝統みたいな感じで、めっちゃめっちゃ張り切って。やっぱりカッコいいです。」「小中、お祭り、何にでもやるという感じ」「あちこちで披露してました。」「1クラスの人数が、30人くらいなので、みんなながしかの太鼓を叩いて、」「芸術文化祭とかっていうところに行くとみんなで太鼓持って行って、披露するっていう機会はありました。」「なんか3年生だけの特権みたいな感じで、3年生になるとあれをやるみたいなふうにやってましたね。」「特に被災したところでしたので、太鼓で元気をついていうような感じで、あちこち行っていた。」「運動会とかお祭りとかでいつもやっていたんですけど、それも日常っていうかいつも何回も見ていました。」「(越戸和美さん)

お二人のお話から、ソーラン節や和太鼓を「先輩から後輩へ」と思いを繋ぐ(小野寺さん)。「伝統みたいな感じで、めっちゃめっちゃ張り切って(越戸さん)」やっている子どもたちの姿が、ありありと伝わってくる。形式や様式のみを伝えていくことが、「伝承」であり、伝えていくことの中心にある精神を受け継いでいくことが「伝統」であるとする、野田村の学校のソーラン節と和太鼓は、まさに「伝統」となっており、その受け継がれるものの中心にある精神は、野田村の人々が被災から復興へと立ち向かった心意気と誇りであるといえる。

(2) 地域に根差した学校

野田村の教育の素晴らしさは、村全体で学校を支えるところにもあることがわかった。

(地域の人が学校の中に入っている取り組みがあれば教えてほしいとの問いに対して)「例えば運動会前にグラウンドに草とか雑草が生えてて、おじいちゃんおばあちゃんを呼んで草取りをしてもらおうとか」、「学校にとにかく来てもらうような形を取ったりしてますね。」「学校としても受け入れるという気持ちでいますので、校長先生をはじめ先生方がほんとに受け入れてくれるので良い関係かなと思います。」「(小野寺さん)

(給食なんかで、地元の農産物や海産物、ホタテとかワカメとか、地元で作ったほうれん草だとかを給食に取り入れて、生産者の方たちにも学校に来てもらって一緒に食べるというような取り組みをしているのを、どのように思われるかとの問いに対して)「新しい小学校が建設の予定があるので」、「どういった小学校を目指しましょうといった話し合いがあったんです。」「村の人たちが、小学校に自由に出入りして」「小学生たちと一緒に何か学ぶとか」、「復興」「津波のことも含めて学んだり、地元のものを出すような給食を一緒に食べたり」「できる学校がいいかなということで、とっても盛んに議論していたところで、先日もそれがあった。」「もうものすごくいろんな意見が出て」、「これからプランニングするんだと思うんですが、とても楽しみなところですね。」「地産地消」の「給食が出てみんなで食べ」たりとか、「そういうのもいいよねというような意見が出たりしてます。」「(越戸さん)

(運動会に地域のおじいちゃんおばあちゃんが草抜きに来てくれるという話をきいたのですがとの問いに対して)「地域の方々も一緒に」「草むしりとかおじいちゃんおばあちゃんも来てみんなでやります。うちも旦那さんとかも草刈り機を持って」「人数が少ないので、とにかくいける人」「みんなで行くみたいな感じでやっています。」「(越戸さん)

(野田村の学校が小規模であることについて)「ほんとに地域というか田舎なので、一クラスしかないですし、保育園の時からずっと同じ友達が中学校卒業するまで全員同じ」「メンバー」なので、「私は町の中の学校だったのでいいと思います。」「仲の良さというか結びつきの強さがすごいな私も感じます。」「(越戸さん)

まさに、地域に根ざし、地域の人々に支えられた学校づくりの典型的な姿が、ここ野田村の中にあるといえる。こうした地域に根ざした学校ができるのは、野田村が、1村1小学校、1中学校、各学年1学級(約30名)の小規模校を維持してきたことによるものであるといえる。

(3)復興の関係性の再建と創造

野田村の復興教育と地域に根ざした学校づくりを、内山(2013)が示した「復

興と関係性」(内山 2013:18)の観点から見てみる。内山氏は、この「復興と関係性」について、次のように述べている。

津波と原発事故は、現象としては、被災者たちの生存基盤を破壊した。だが、本当に破壊されたものは、生とともにあったさまざまな関係である。家族とともにあった関係、近所の人々とともにあった関係、親戚や友人、知人とともにあった関係、町や村、集落とともにあった関係、墓や寺、先祖、神社や祭り、地域の文化や歴史、子どもや孫たちとともにあった未来との関係、自然との関係……。そういうさまざまな関係とともに人は生を獲得してきたのであり、関係がその人の生をつくりだしていたといっていよい。(内山 2013:18)

従って、復興とは、この破壊された関係の再建と創造であると内山はいうのである(内山2013)。この「復興と関係性」との観点から、野田村の復興教育と地域に根ざした学校づくりを見ると、その取り組み内容のすべてが、震災前に子どもたちの生とともにあった様々な関係の再建と創造であるといえる。子どもと家族との関係、子ども同士の関係、教師との関係、地域の人々との関係、地域の自然と文化との関係、他地域で被災した子どもとの関係など、子どもをとりまく様々な関係の再建と創造であった。

野田村の復興教育と地域に根ざした学校づくりが、私たちに大きな感銘をあたえるのは、なぜなのだろうか。それは、野田村の教育が、この震災によって破壊された関係性の再建と創造という復興の本質に合致したものとなっているからである。さらには、この破壊された関係性の再建と創造という課題は、被災地においてだけではなく、生を支える様々な関係性を喪失しているすべての人々にとっても、すなわち、私たちにとっても重要な課題となっているからである。

2-2. 外部との交流班「野田村の外部との交流」

川崎 悠丘（かわさき ゆうき） 人間行動学講座

陶 珮菡（とう げつかん） 未来共生学講座

馬 可悦（ま かえつ） 未来共生学講座

外部との交流に関心を持つ野田村の2人の村民(平谷東英さん、小野寺信子)にオンラインインタビューを行った。

(1) 野田村の外部との交流の変化

野田村は海と山に囲まれ、地理的に外部からアクセスしにくい閉鎖性のある土地だった。また、インタビューから、震災前の野田村は、出稼ぎで村の外に出る人が多かったことが分かった。豊かな自然を持ちながらも観光客は極めて少なく、震災前の野田村が外部との交流が盛んであったとは言い難い。

震災直後、多くのボランティア団体が野田村に駆けつけ、迅速な支援活動を行った。そして野田村の復興事業も早期に取り組みされた。これは復興活動の中で野田村へ駆けつけてきた人たちの力によるところが大きい。外部の人が来たことで、野田村の人々の生活も変わった。小野寺さんは

「震災前は野田村という枠の中で、閉じこもって生活してしまうようなところがありました。震災後は、被災者としてどう関わらなければならないのか悩んでしまうところがありましたが、ボランティアの方々のおかげで気持ちが通じあってきているのだと感じています。」

（『東日本大震災と災害ボランティア』小野寺信子さんインタビューより）

と語ってくださった。このように、震災前の野田村は比較的小規模で閉鎖的な村だった。野田村観光協会の会長である平谷さんからも、野田村の村民はまだよそ者との付き合い方が苦手だという話を聞いた。何か話しかけられると警戒してしまう、緊張する。そんなシャイな人が多い野田村だが、震災からの復興活動にかかわった外部のボランティアにはポジティブな印象を持っている。

「印象に残っているのは祭りなどのイベントです。ボランティアの学生さんが手伝ってくれて助かりました。震災で大変でしたが、なんとかみんなで頑張っ

て協力して活動できたと思っています。」

「当時を振り返れば、復興にからむ委員会がすごく増えた時期だったことが印象に残っています。その中でもワークショップなどで、先生方や学生さんたちと交流ができて、震災のおかげというと語弊がありますが、いろいろ楽しく学べたなあという記憶が残っています。」

（『東日本大震災と災害ボランティア』商工会青年部インタビューより）

震災直後から震災の復興活動に至るまで、野田村の人々は少しずつ外部との新たなつながりを築いてきた。復興活動を通じて、外部の人と当事者が一緒に生活し、野田村の将来を考えていくことで、徐々に絆や相互依存的な信頼関係が生まれている。このような相互依存関係があるからこそ、地理的に離れていても、両者の間には安定した継続的な交流が生まれるのだ。しかし、震災から10年を迎えた今年は、昨年のコロナ禍の流行から、野田村を訪れる人が激減し、村出身の人でもなかなか帰省できない状況になってしまった。そんな中、インタビューでは受動的に外部者の訪問を受け入れているのではなく、野田村の人々も外部とのつながりを求めていることがわかった。この傾向が見えるようになってきた背景には野田村の人口減少がある。少子高齢化が加速する中で、人口問題は野田村にとっては致命的な問題である。子どもがいないと学校は存続できなくなり、伝統行事の展開も困難になる。そこで、小野寺さんに野田村への移住人口について聞いてみると、

「それ（移住など）はもう本当に願ってますね。やっぱりほら今コロナですごく仕事がなくて大変大変って。片や働いてくれる人がいなくて大変大変。そこがなんかうまくいかないもんかなと思ってねえ。ほんとに。食べるものもなくなって、お金もない食べるものもない苦しんでるっていうのを聞くと心が痛くて。田舎にいとそんなことは。ほんとにねえ。田舎にいとそんな問題は解消されるんじゃないかと。うまくいかないですね。」

とおっしゃった。これは野田村だけの課題ではない。コロナ禍の下、都市部の人々は失業や感染のリスクに苦しんでいる。一方、野田村のように人口が減少したところでは、人手不足で存続が難しい状況に直面している。

(2) 外部との交流のツールとしての民泊やお祭り

震災後、学生ボランティアを中心とした交流人口が増加し、それに伴って宿泊施設のニーズも高まっていた。従来のホステルやホテルに加えて、より特色があるのは、学生が地元の村民と直接交流できる民泊である。民泊は、外部の人が自然に現地の人の生活に入ることができる特別な媒体であり、現地の人と外部から来た人を知る窓口を提供している。このような媒介によって、現地の人と外部の人との距離を一気に縮め、信頼感を生むことができる。

平谷さんへのインタビューによれば、一部の村民たちが外部の人間を受け入れるには、確かに段階的なプロセスがあることが分かった。

「一昨年くらいまでは、野田村のお祭りの時期に大阪大学のみなさんの先輩が来て地域を歩くということをやっていて、私が住んでいる〇〇という地域にも2人か3人が必ず来てくれて、最初は地域のおばあちゃんにそれを言うところ「え！？うちには来ないで！」と言われたけれど、一度会って話をすると、次の年からは「今年は来ないの？」と聞かれた。」

このように、最初は外からの人に抵抗感を持っていた村民たちに、「最初の一步を踏み出す」ためにはどうすればいいのか？民泊は、まさにこうしたつながりを触発する場だと考える。外部の人が民泊という空間の中で、地元の方の方言を聞いたり、地元の食材で作った郷土料理を食べたりすることで、より五感で立体的に野田村を体験できるのではないだろうか。今回の取材では、民泊をきっかけにホストとの関係が長く続いている例があることも知った。

「最初民泊を受け入れるときに、お酒を飲める女の子を入れてもらえるように頼んでいた。うちは奥さんもお酒を飲みますから、女の子を入れてもらおうと、最初は固いけれど次の日から親子のようになるんですね。で、楽しかったということで、また続けて来てくれたり、Facebookや手紙で付き合ってくれる子がいるので、奥さんに「やってよかった」と思わせたいのが正解だったし、自分としても、最初は女の子に何を話していいかわからず、息子と呼び戻して、大人数で飲んで仲良くなって、それで3年か4年受け入れをしました。」

このように、こうしたより「親密」なコミュニケーションの仕方が、外部者と

地元の人との絆をより深く、長く持続させることができることがわかる。民泊をはじめとした農業体験や祭りなど、重要なコミュニケーションツールとしての役割を担っている。

(3)交流を通じて掘り起こされる、村への誇りとアイデンティティ

過去の資料閲覧やインタビューから、野田村の人たちが自分たちの村に誇りを持っていることがよくわかる。野田村の人々は、伝統行事やお祭りなどを通じて外部の人と交流するが、それは村民たちのアイデンティティや故郷に対する誇りを深めることにもつながっているのではないかと考えられる。つまり、交流の中で掘り起こされるアイデンティティは、野田村の伝承には欠かせないものなのではないだろうか。そんな誇りとアイデンティティをいかに次の世代に伝えていくのか、ヒントになるのが小野寺さんの農業体験の話だった。

野田村大学のホームページを閲覧してみると、学長と理事長の対談から興味深い話を見つけた。それは料理を作る話から出てきた「教えると伝える」のお話だった。

「ずっと地元の人たちは、地元の料理つっても…こだわって作ってるわけでもなくただ作ってるだけだから、教えるのじゃないんだよ！（そうではなく）教えるでなくて、私の場合は「伝える」だよね。「伝える」だけど、ひとそれぞれやり方が違うから、“こうしたほうがいいな”と思って、自分がそこに付け加えたものが「教える」部分になるのかなと思って……教えるつつのは、なんか、おこがましいなと思って。自分が、すごく勉強して覚えたつのでないから…昔の人が伝えて、伝わって……若い人だと、「伝える」が「教える」になっちゃうよね。“こんなこと聞いた”って人に自慢したくなっちゃうというか……そうじゃないって言うところが、学長ぐらゐの年代のひとたちの…吸収も、ある程度の経験を積んで初めて生きてくることだと思うよ。若い人は、ちゃんと理論で聞きたいのね、「これはこういう理由だからこうするんだ」とか…年寄りゃそうでないの。「こりゃあこうだせえでこうだ！（これはこういうモノだからこうだ）」つつう感じ！」

これは小野寺さんが学生に料理を教えていた時に思ったことである。「教える」と「伝える」の違いを指摘することで、地元の人たちのアイデンティティが

見えてくる。言葉という媒体では伝わりにくいものがある。経験を積むことこそが「伝える」に到達する媒体である。それは伝えられる側にも「ゆっくり」、傲慢さや焦りを捨てて、落ち着いて感じることが求められる。

2-3. 暮らし・自然班『伝えていくもの』と『伝わっていく(きた)もの』

岩本 真由子(いわもと まゆこ) グローバル共生学講座

梶 健太(かこい けんた) 未来共生学講座

倉田 和佳(くらた わか) 未来共生学講座

李 傑豪(り けつごう) 社会環境学講座

私たちはインタビューで野田村の暮らしと自然についてお話を伺ってきた。今回のオンラインフィールドワークのテーマである「野田村の記憶と記録を伝える」について、“暮らし”と“自然”を伝える／伝承するとはどのようなことであるのかについて考察をしていきたい。

まずはじめに自然の伝承について考えていきたい。今回のインタビューでは、米田やすさん・内野澤進さん、てるさん夫妻の暮らしについての話題が多かったため、自然を伝承することについては十分に考察しきれないかもしれない。しかしながら、野田村という自然の中で生活している三人のお話から重要な語りを得たので、それを頼りに考察を進めていきたいと思う。自然の伝承を考えるにあたり最も印象的だった語りは、私たちがポロっと発した「異常気象」という言葉に対して、少し語気を荒げて語った進さんの次の言葉である。

「異常気象じゃない。人間社会で壊したのだから、自分たちが便利な生活求めて壊したのだから、人間の方が異常なのです。自然でなく。」

その言葉の力強さから進さんが自然と共に生活する中で、身をもって感じていることがそのまま表現された言葉であった。自然と共に生活している進さんにとって現代人の生活は自分たちの便利さを優先するあまり自然を過度な形で搾取していると見えているだろう。異常気象という言葉からは異常なのは自然であるように思われてしまうが、自然はいつも変わらず存在して、その自然に手を加え壊してしまう人間の側に「異常さ」があると進さんは伝えたかったのである。また、自然を利用しようとする人間の傲慢さは結果的に異常気象として

人間にとって悪い形で帰ってくるということも示している。このことから自然の伝承について考えると、人間の思ったような形で自然を次の世代に伝えることができると思うのは人間の「異常さ」と言えるのではないだろうか。人間の「異常さ」によって自然に過度に手を加えて、人間にとって都合の良い自然にして次の世代へと伝えるということはあってはならない。つまり人間の手によって思いのままに自然を伝承するということは不可能なことである。この自然の伝承の不可能性を踏まえたうえで、あえて自然の伝承とはどのようなことであるかを考えると、自然の伝承とは「伝える」という能動的な態度ではなく、自然を「享受する」という受動的な態度として捉えることができるのではないだろうか。野田村での生活は、自分たちの生活に足る分だけ海の幸、山の幸を享受するという自然のサイクルの中にある生活である。その生活は、人間の利益だけを考え自然を利用するのではなく、自然が変わらない範疇でありのままに存在する自然を享受し続けるという受動的な態度である。つまり、現在のありのままに存在する自然をそれが変わらない形で享受し、そのまま次の世代に受け渡すことが自然の伝承と言えるのではないか。

次に暮らしの伝承について考えていきたい。暮らしとは人間の生と深く関わっており、人の生き方に大きな影響を与えるものである。そのため、暮らしの伝承ということを考える際には慎重になる必要がある。今回のインタビューを通して暮らしの伝承には二つの伝わり方があると考えた。「伝えていくもの」と「伝わっていく(きた)もの」である。通常、伝承を考える際にはどのようにして伝えていくかということを考えるため、伝承の対象が「伝えていくもの」になる。しかしながら、先ほども述べたように暮らしは人間の生に深くかかわっているため、暮らしの伝承においては後者の「伝わっていく(きた)もの」の方が重要であり、より注意深く見ていかなければならない。それでは、両者について詳述していきたい。

「伝えていくもの」とは、伝えたいという思いのあるものである。今回のインタビューの中では、進さんの言っていた震災の体験や、やすさんの豆腐作りがそれに当たる。震災のことに関しては、他人の経験として聞くのではなく若い世代の人が自分事として受け止め、災害が起こったときの教訓になるようにしなければならないと進さんは述べている。また、やすさんの豆腐作りに関しては、“野田村の豆腐”として野田村の特産品にしたいと語っている。両者に共通して言えることは、それを残していきたい理由が自分のためではなく、次の若

い世代のため、野田村のためにあるということだ。そこには誰かの暮らしを豊かにしたいという思いが隠されている。こういった事柄に関しては積極的に伝えるという実践を行っていくこと、つまり「伝えていくもの」にする必要がある。私たちのような野田村の人間でない者であっても積極的に関わり、当事者とともに伝えていく実践を行うことができると考える。その際に大切なこととなるのは、残したい／伝えたいという思いがあること（「伝えていくもの」であること）をしっかりと認識したうえで、その思いに寄り添い実践を行うことである。そうすることで野田村の暮らしの記憶と記録は確実に伝わっていくのではないだろうか。

続いて「伝わっていく（きた）もの」についての考察を行う。「伝わっていく（きた）もの」とは、伝えようという明確な意思は存在しないが、その土地において脈々と伝えられてきたものである。本来、暮らしとはそのようなものであるのではないか。内野澤さんが住む日形井集落における南部曲がり家での暮らしも、その土地に最も適した暮らしであり豊かな生活であるとされていたために伝わってきたのである。元来、暮らしはおのずから伝わっていくものであると考えると、暮らしを無理やり伝えようとしていくこと、さらにはそこに外部者が関わり伝統的だからという理由だけで残していこうとすることは誤りのように思える。実際に、進さんも昔ながらの生活を伝えていいか分からないと語っているように、暮らしの押し付けになってはいけないということを誰よりも当事者が理解しているのだ。一方で、進さんもてるさんも日形井集落での豊かな暮らしが伝わってほしいとも思っている。その暮らしが今伝わっていない最大の理由としては、産業主義社会の中で効率的で便利であることが唯一の豊かさの基準とされているために、若い世代が野田村での暮らしに豊かさを見いだせていない点にあるのではないだろうか。この現状を変えることは、次の世代の一人一人の価値観を変えることと同義であるため、かなり難しいことのように思える。しかしながら、豊かさは多様であることを伝えることはできるし、暮らしの選択肢を与えることもできる。最終的にその土地でどのように生きるのか、どのような暮らしを選択するのかは個人にゆだねられるが、現代の画一的な価値観に縛られない豊かさがそこにはあるだろう。「伝わっていく（きた）もの」としての暮らしの伝承とは、その土地において最適であり、豊かだと思われる生活がおのずと伝わっていくことである。伝統的な暮らしを無理やり次の世代へと伝えていくのではなく、次の世代へその暮らしの豊かさを伝えていくことが

重要である。なぜなら、その土地での暮らしの豊かさに気付いた者によっておのずと暮らしの伝承が行われていくからだ。

2-4. 世代・高齢者班「伝承の『場』を設けることが必要ではないか」

鬼村 拓弥(おにむら たくや) 行動生態学講座

宋 玥(そう げつ) 社会環境学講座

張 鈺琦(ちょう ぎょくき) 未来共生学講座

野田村の方々にお話を伺い、「野田村の記憶と記録を伝える」というテーマのもとでフィールドワークを行った。特に「世代」や「高齢者」というキーワードに着目し、インタビューを進めた。そして、3人の方々(小谷地栄喜さん、小谷地勝さん、大平妙子さん)のお話を伺ううちに、伝承の「場」を設けることが必要ではないかと考えた。

(1) 後継者不足

現在の消防団は高齢化が進み、二十代はゼロではないが、非常に少ないことは事実である。今、消防団員の多くは地元の自営業の方、また役場に勤めている三十代から五十代の方である。これにより、消防団で「世代間のギャップ」が生じている。そして震災を経験していない人が多いので、防災に対する意識が違ふことがあるそうだ。例えば、津波が来たとき、本当に津波が来るのだと感じない人が多くいると思われる。また、火事に関して言えば、火災活動に参加したことがない人もいて、火に対する恐怖が分からない人もいる。

その上、小谷地さんは後継者不足という問題は、今後の消防団の発展から考えれば大きな問題であると感じていた。年を取って体の動きが悪くなり体力も落ちてしまったので、近隣の住民の方の協力も必要になってくるのではないのかと小谷地さんは話してくださった。

若い世代に何か伝えたいこと聞かれた時、小谷地さんは

「自分が若い頃は自分たちの町は自分たちで守るって意識あったんだけど、今の子達、若い世代は違うような気がすんですね。消防に入ったから活動しなきゃならないとかじゃなくて、やっぱり自分らの町は自分らで守るっていう

意識があればいいなって思いますね。」

と答えてくださった。私たちは野田村の若者の少なさを痛感した。

確かに、若い世代は社会の文化・経済発展の原動力であり、自分の力で将来を切り拓いていける時期である。その若者が地方から大都市に流出し、若者不足の危機に晒されている自治体が増えている。地域創生の視点から、若者に野田村にとどまってもらうという考え方よりも、若者を経験やスキルアップのための修学また研修期間と考えて他地域へと送り出し、その後、地元へのスキルや愛着も高まって野田村に戻ってきたら、彼らをバックアップして、ともに野田村の長所を活かして地元で仕事を生み続ける地域環境を築いていくことのほうが長期的視野で考えた際に良いのではないのかと感じた。

(2)若い人に伝えたいこと

小谷地勝さんが野田村のこれからと若者に伝えたいことを伺った。また、これまで何度か出てきた野田村の高齢化の課題についての若い人たちの理解を伺った。

「まあ、知ってんだろうけど、そこまであの若い人達は今えっと親身には考えてないと思いますよ。うん当然やはりね。ある程度年取ってきてからじゃないととか自分の親が、誰でも年取ってこないとそういうのはやはり人任せていうところがあるっていうのはもう、あの一昔と違ってですね。今は本当にそういうことになります。ましてや見れないです。今はうん、もうそういう時代になっちゃってたんじゃないかな。」

(2021/8/21 小谷地勝さんインタビューより)

この言葉を聞いて、若い人たちが野田村の現状を把握しづらい環境があるのではないかと考えた。世代間での交流が減ることで、高齢者の生活や困難に気付く機会が少ないのではないだろうか。そのため、家族が高齢化したとき、はじめて当事者としての意識が芽生えるのでは遅く、若い人たちへ野田村の現状を伝えることが課題ではないと感じた。

そして、野田村の若者に伝えたいことを伺った。

「えっとね、あの野田村の若者についていうことになる、ちょっと難しいので、そうじゃなくて、やはりもう少し若い人が残れるような村を作っていかなとですね、ますますちょっとなんていうんだ、高齢化が進み過ぎてしまうっていうのが現状なので、うん、若者にどうたらってことじゃなくて残れる状態を作ってくれないと、人が増えていかないというか、まあ増えるとも言わないんだけど、残れる人がやっぱりもうちょっと増えてくれば、あの野田村としては助かんじゃないかな？という思いですね。」

(2021/8/21 小谷地勝さんインタビューより)

と小谷地さんは仰った。この言葉を聞いて世代間で「何を伝えていくのか」というよりも、「何かを伝えることができる環境づくり」が必要なのではないかと考えた。環境ができれば、自然と世代間での交流が増え、野田村の記録や記憶が伝わっていくのではないだろうか。

(3) 「野田をいっぱい好きになってほしい。」「おばちゃんたちも頑張ります」

大平さんに高齢者世代と大平さんよりも若者の世代にそれぞれ伝えたいことを伺った。上の世代に関して、大平さんはこのように答えてくださった。

「えっとですね、私達の世代はその上の世代に育ててもらってきた世代でもあります、まだちょっとすみません。元気な人はまだまだよろしく願います。いいえ、まだまだ一緒に動きましょって言いたいところがあるんですね。」

(2021/8/22 大平妙子さんインタビューより)

高齢者の方には、高齢者だからと言って、活動をやめるのではなく、年齢を気にせずに下の世代と連携しながら活躍して欲しいという思いは伝わった。下の世代に対して、大平さんは子どもにこのように伝えたいと仰った。

「若い人たちには、そうかな？いっぱい野田村を好きになってねとは、あの特に小さい子ども達には思ってます。いっぱい野田をこういうのがいいよ、ああいうのがいいよって野田をいっぱい好きになってほしいなと。」

また、20代前後の若者に対して、大平さんはこのように仰った。

「もうちょっと上の若い方、二十代ぐらいの方だと、仕事作ってあげられなくてごめんねじゃないですけど、自分は仕事をうまく見つけて戻ってこれましたけど、なかなか帰ってきて野田にずっと住み続けたくても仕事をこっちでうまく見つけられなくてっていうパターンはよく聞くので、いいお仕事があって、ずっとあの自分の住みたいところに住んでいられたらいいよね、というのは思うので、まあ、あのちょっと時間かかるかもしれないけど、おばちゃんたちも頑張りますとだけは伝えたいです。」

(2021/8/22 大平妙子さんインタビューより)

(4) 伝える「場」が必要

自分より若い世代を思いやる様子が3人から共通して感じ取ることが出来た。しかし、それを上手く伝える環境がなく、心配されている印象も受けた。記録や震災の伝承施設など、ハード面での伝承はこれまでの10年で行われてきたのではないだろうか。一方で、震災当時の危機感のある生の声や生まれ育った野田村への思い、野田村の観光資源や魅力、そして抱える問題について野田村の外から来られた方や若い世代は知る機会が少ないのではないだろうか。また、同世代同士のつながりの場も必要であると感じた。若い世代同士、高齢者同士が関わることで孤立を防ぎ、野田村を盛り上げることができると考えた。

3. おわりに

各班の報告書を読んでいただくと、オンラインであっても受講生が野田村を知り、野田村のみなさんとの対話を重ね、野田村の何をどのように誰に伝えていくのか“一緒に”考えることができたように感じるだろう。

それは、毎年、本授業を受け入れてくれている野田村のみなさんが、オンラインであっても学生たちを慮って、熱心且的確にお話をしてくださったからである。また、野田村には、被災、復旧、復興という時間のつながり、村民と村民のつながり、村の行事や地域活動のつながり、そして外部者である大阪大学と野田村とが積み重ねてきたつながりがある。学生たちはオンラインで聞いた話を本授業の8年間の過去の記録とつなげ、様々なつながりを感じ、理解し、

語りの広がりや深みを知り、学ぶことができたからである。

来年こそは、本来のフィールドワークを実施し、野田村との新たなつながりを広げ、重ねていけることを願うばかりである。

本稿の詳細は「コミュニティ・ラーニング2021 東日本大震災被災地復興フィールドワーク報告書」として発行している。人間科学研究科附属未来共創センターで配布しているので、読んでいただけると幸いである。

最後になりましたが、コミュニティ・ラーニングの実施にあたってご協力いただきましたチーム北リアス現地事務所長貫牛利一氏をはじめ野田村のみなさまに、心より感謝申し上げます。